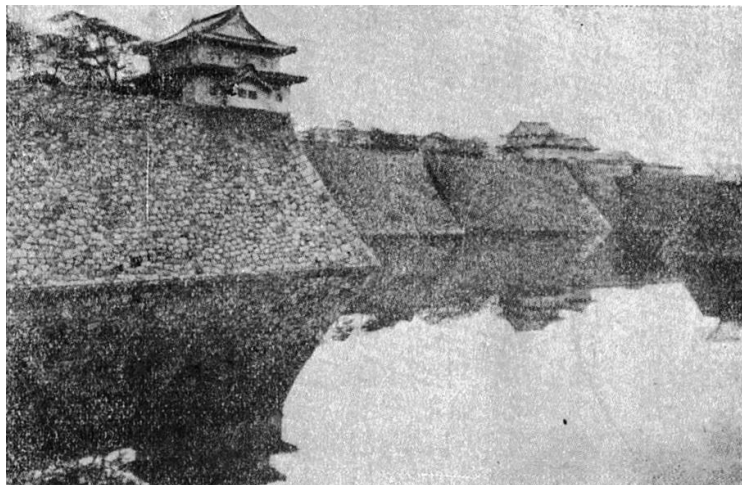


第 21 話 豊臣秀吉の国内統一

秀吉は堅固な城を大阪に築いて、ここを根拠地とする。南に、北に、西に、東に、あるいは兵を出し、あるいは親ら征して、たちまち全国を平定する。久しぶりに見る昇平の日、秀吉の勤王と栄達。

大阪城の修築

天正 11 年 5 月、秀吉は大阪城の修築に取りかかった。この地はもと一向一揆で有名な石山本願寺の址で、更に古く遡れば、昔、仁徳天皇が皇居を営まれたところ



昭和初期の大阪城 (天守閣は未再建)

です。北には淀川、南には大和川を控え、東は河内平野を望み、西は海に面している丘陵地で、水陸の交通が頗る便利である上に、又、要害堅固なところでもありました。

秀吉は、これまで天王山の宝寺城を根拠地としていたのですが、いよいよ信長の遺業を継いで、天下を平定しようとする段になって見ると、その地は土地も狭く、交通も不便でしたので、ここに新たに大規模な城を築こうとしたのです。

彼は勢いに任せて、諸国から大石、巨木を集め、又、30 余国から人夫を出させて、大いに工事に従わせたので、早くも翌年 8 月には殆ど出来上がりました。

その広さは、東西およそ 2.2 km、南北およそ 2 km、東は猫間川、北は淀川を限りとして、西は今の東横堀、南は空濠通りにまで及んでいたと言いますので、現在の大阪城は元の城地の四分の一にも足りないわけ

であります。いかに大規模のものであったかが分かるでしょう。濠は深く、石垣は高く、8 重の天守閣は雲を凌いで聳え、その周囲には広大な建物がひしひしと建ち並んでいました。城の楼閣に用いた瓦には、金箔を施したので、遠いところから望み見られたとも伝えられています。所謂難攻不落の金城鉄壁だったばかりか、その壮麗で荘厳な点でもまた、未だかつて見

なかつたところであったのです。秀吉は城を築くと共に、城下に市街を開かせたので、忽ち四方から人々が集まって、やがて大阪は海内第一の大都会となりました。

織田信雄と家康との合体

ところが、秀吉の威名がこうしてますます盛んになると、亡くなった信孝の兄の織田信雄もまた安心が出来なくなった。彼もまた織田信孝や柴田勝家のように滅ぼされはしまいかと、心配し出したの

第 21 話 豊臣秀吉の国内統一

です。それで、却って先んじて秀吉を除こうと企て、助けを徳川家康に求めた。家康は、信長に対する元の恩義があるので、快くこれを承諾して、信雄と合体することにしました。

天正 12 年 3 月、家康は自ら 15,000 の兵を率いて浜松を出発し、尾張の清洲に信雄と会して、秀吉に對抗する策を立てた。先づ越中の佐々成政、四国の長曾我部元親、紀伊の根来、雑賀の僧徒および本願寺派の門徒らを誘って、同時に秀吉に反抗して起たせることにした。そしてその 16 日に 2 人は進んで小牧山に陣取った。というのは、この時、秀吉方の池田信輝、森長可らが美濃から尾張に攻め入って、すでに犬山城を陥れ、更に羽黒、楽田等の民家を焼いて、小牧山に迫ろうとしていたからです。

小牧の対陣

一方、秀吉は、家康と信雄の連合の事を大阪で聞いて、すぐに大兵を率いて出発しようとしていたところ、早くも紀伊の根来、雑賀の僧徒が、家康らの勧誘に応じて、海陸から大阪を攻めようとして来たので、諸将に命じて、先づこれを和泉に撃破ってから出発しました。3 月 21 日の事で、その率いた兵は 125,000 にのぼり、先鋒の軍が美濃に行っているのに、後陣はなお山城の山科、醍醐、宇治にいたという事です。

秀吉は 27 日に犬山に着いて、その附近に多くの砦を設けて、小牧山に対して陣を取った。

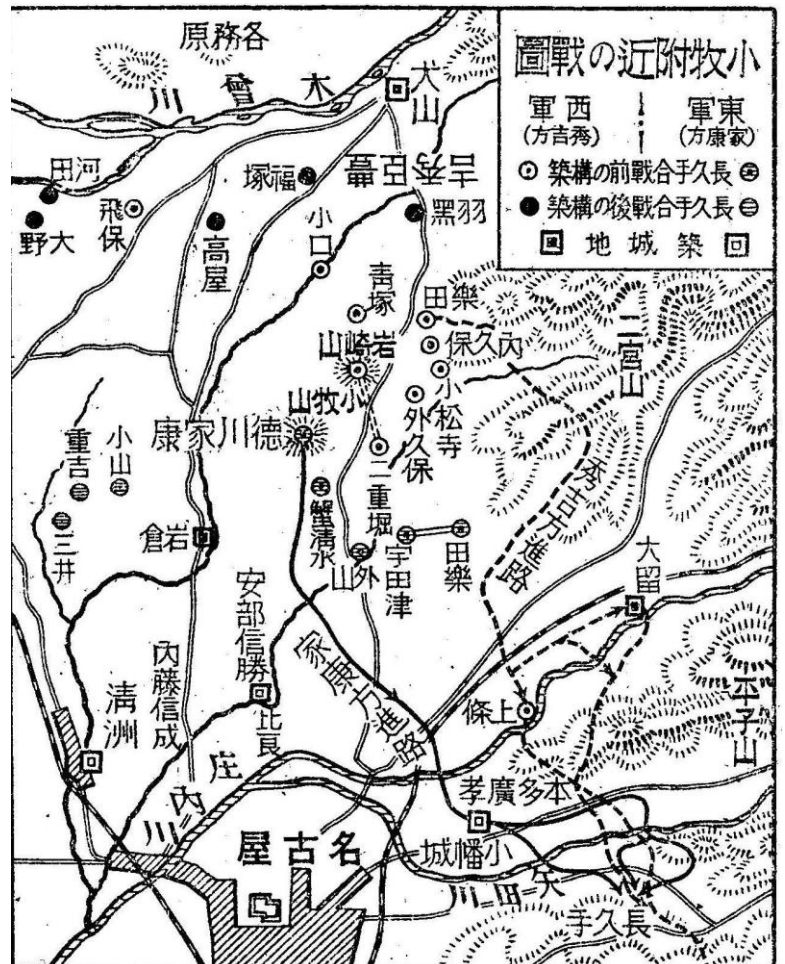
けれども、双方共に容易に兵は動かさなかった。互いにただその動静を窺っていました。というのは、こういう對抗戦になると、秀吉は賤嶽と同じように、兵を動かせば必ず敵に便宜を与えるような形勢になり易いと考えたからです。4 月に入ってもその情勢は同じでした。

すると、池田信輝、森長可らが秀吉に請うて、家康の留守に乗じてその本拠の三河を衝こうとした。初め、秀吉はこれを許さなかったが、信輝らが切に請うて止まないのので、ついにこれを許した。

彼は甥の秀次を主将として、信輝、長可らと共に進ませ、別に堀秀政を援軍として遣わした。そして自分は本営を楽田に進めて、家康に当るといふ形勢を示した。

長久手の敗戦

ところが、家康は早くもこれを知って、すぐに榊原康政らに信輝らの後を追わせた。そして、小牧山



第21話 豊臣秀吉の国内統一

には兵を留めて守らせておいて、自分は織田信雄と共に兵を進め、長久手（名古屋市の東方約12km）に信輝らをかえ撃つて大いにこれを破つた。4月9日の事です。全く不意を討たれたために、信輝も長可もここで戦死して、秀次らは僅かに身をもって逃れた。

秀吉はこの敗軍を聞くと、敵の驕るに乗じてこれを襲おうと、すぐに兵を率いて長久手に向つた。しかし途中まで行つた時に、すでに家康が軍を取めて小牧山に引き返したのを知つて、その機敏なのに驚いて秀吉は楽田に帰つた。

和睦

こうして対陣はまた元の如くにつづいた。これではいつまでもはてしが無いので、ついに秀吉は和睦の相談を始めて、先づ織田信雄と和睦して、次に家康と和睦した。かつて1度も敗れたことのない秀吉も、この時には破られたので、これより家康の武名が大いにあがりました。世にこの戦いを厳島の戦い、山崎の戦いと並べ称して、戦国時代の3大義戦といい、又、これに川中島の戦いを加えて、4大義戦とも言っています。

紀伊征伐

さて、この和睦がととのつたのは天正12年の12月でしたが、こうしてこの方面の心配が全くなくなると、秀吉はその翌年13年3月下旬に自ら100,000の兵を率いて紀伊に向かい、久しく彼に反抗していた根来寺（那賀郡根来村にある真言宗新義派の総本山で、正しくは大伝法院といひます）の僧徒および本願寺の門徒らを伐つて、根こそぎこれを覆えした。

四国征伐

そして、4月に大阪に凱旋したが、翌々月の6月には、更に弟の秀長および甥の秀次に60,000の兵を授けて阿波に向わせた。これと、20,000余の兵を率いて讃岐に向つた岡山の城主宇喜多秀家と、30,000余の兵を率いて伊予に向つた毛利輝元と共に、3方から進んで土佐の長曾我部元親を伐たせた。秀吉方は連戦連勝、向うところ敵なしという有様なので、久しく四国に覇を称えていた元親も、ついにその7月に出でて降つた。秀吉はこれを許して、土佐1国を元親に与え、彼が侵略した他の3ヶ国はこれを分けて有功の将士に与えた。

北陸征伐

その翌月、即ち天正13年8月、秀吉は自ら100,000の兵を率いて北陸に向つた。越中の佐々成政を討つためです。元来、成政は柴田勝家と同じく、信長の武将でして、しばしば軍功を立てたために、天正9年以来、越中の領主として富山城にいたのです。勝家の亡びた後は、よんどころなく一時秀吉に頭を下げては見たが、もとより本心ではなかつたので、小牧・長久手の戦い時には、はるかに兵を越中に挙げて信雄に応じた。のみならず、秀吉が信雄らと和睦してから後も、彼は独り態度を改めずに、どこまでも秀吉に反抗しようとしていたので、さてこそ今度の征伐となつたのです。

第21話 豊臣秀吉の国内統一

さて秀吉が、前田利家を先駆として越中に迫ると、成政は大いに防戦するつもりで、一旦は30余箇所
に砦を設けて防いで見たが、而かも忽ち敗れて富山城に退き、僅かに対抗7日の後に、髪を剃って出で
降った。秀吉は以前の誼を思っこれを許し、越中のうち新川郡の1郡を成政に与えて、その余り
を前田利家に与えた。

こうして後に、秀吉は越後に進んで、かねてから彼に
好意を示して、身方同様になっていた上杉景勝と、初め
て越水城（新潟県青海村、現糸魚川市）で会って、主従
の約を固めて引き返した。これで北陸方面もまたことごとく
平らいで、全く秀吉の配下に属したのです。

秀吉の栄進

この間にも秀吉の官位は次第に進んだ。天正
12年11月 - 織田信雄と和睦した後 -- には、従三位に
叙して権大納言にも任ぜられ、その翌13年3月には、正
二位内大臣に昇せられた。これは、そのころ、正親町天
皇に譲位の意向があったが、上皇となってお住まいにな
るべき仙洞御所が荒れすたれていたもので、譲位を見合わ
せになっていた。それで、秀吉が奏請して仙洞御所の
造営に着手したので、深くその志を嘉されたの
です。

同年7月、長曾我部元親を降して四国を平定すると、朝廷は特に秀吉を従一位に叙し、関白に任ぜら
れた。藤原氏の嫡流でなくて関白になったのは、実に秀吉が最初です。先例を重んじる公卿らは勿
論、世間の者もこれには全く驚いて目を丸くしたということです。

またこの時、特に宣旨が下って、秀吉の生母を大政所、夫人を北政所と呼ばせることにされたが、
これはもと摂政または関白の母および夫人の尊称ですから、秀吉がすでに関白になった以上は当然のこ
ととはいえ、五摂家でもない羽柴家にとっては大変な名誉だったのです。

五奉行

さて、秀吉は関白となると共に、部下から前田玄以、浅野長政、石田三成、増田長盛、長束正家の五
人を選んで、もろもろの政務をつかさどらせた。世にいう五奉行がこれで、彼等はよく秀吉の意を体して、
人々のためを図った。中でも、京都の四方に土手を築いて市街を整理したこと、諸国の田地を測量して田
制のみだれたのを正しくしたこと（注：太閤検地）、租税の率を定めて人々の負担を軽くしたこと、金貨な
どを鑄て新たに貨幣の制を立てたことなどは、殊に治績の明らかなものとして聞こえます。



豊臣秀吉

第21話 豊臣秀吉の国内統一

じんぐう ぞうえい 神宮の造営

ひでよし てんしょう じんぐう ないぐう げぐうとも ぞうえい たてまつ せんぐう しき あ
秀吉はまた天正13年に伊勢の神宮を、内宮、外宮共に造営し奉って、その10月にご遷宮の式を挙げた。伊勢の神宮のご遷宮は、彼の主人の信長の志でもあったのですが、にわかに斃れて、これを果たすことが出来なかったもので、秀吉がその遺志を継いだとも見られるのです。外宮は、先に慶光院清順の尽力でご遷宮が行われてから22年目でしたが、内宮は、後花園天皇の寛正3年以來のことで、実に123年目のご遷宮であったということです。皇室のご満足は申すも長く、地下の信長の霊もさぞ喜んだことでしょう。

せんとうごしよ らくせい おおぎまち たねん じょうい
その翌天正14年11月、仙洞御所もすでに落成したので、正親町天皇は多年のおぼしめしでしたご讓位をなされた。尤も、皇太子の誠仁親王は、その7月に、俄かに病でお薨れになったので、その御子の和仁親王をお立てしたのです。これを第107代後陽成天皇と申し上げます。

とよとみ せい たまわ 豊臣の姓を賜る

ひでよし だじょうだいじん にん とく とよとみ せい たまわ み びせん お
天皇は、その年の12月、秀吉を太政大臣に任じて、特に豊臣の姓を賜った。彼が身を微賤より起こして、誰の子孫であるかも不明であったところから、或いは平氏を称し、或いは藤原氏を称していたが、自分でも快く思っていなかったのを天皇は察しになっての事です。

きよすかいぎ のち じょうきょう じゅごいげ じょ さこんえのしょうしょう にん
それにしても、清洲会議の後上京して、従五位下に叙し、左近衛少将に任ぜられた天正10年10月から、僅か4年余りにしかならないのに、早くも位が人臣を極めたのです。その榮進の速いことは、古今を通じて彼の右に出るものが無いといわれる通りです。

さき ひでよし うちの ていたく つく はじ かんせい
これより先き、秀吉は京都の内野に自分の邸宅を造り始めていたが、全く完成したのは、天正15年でした。世に名高い聚楽第(注:第は、邸の意)が即ちそれですが、これに引き移る前に、彼は遠く九州の征伐をしました。

さつま しまづ し 薩摩の島津氏

さつま しまづ よしひさ すこぶ いきお さか きんごく おか
このころ、九州では、薩摩の島津義久が頗る勢いが盛んで、しきりに兵を出して近国を侵していたが、すでに九州の南半分は殆ど悉くこれを略して、ついに進んで豊後の大友宗麟(義鎮)に迫った。大友氏は漸く勢いが衰えていた時でしたので、迎もこれに敵しかねて、天正14年3月、宗麟は自ら大阪城に至って援けを秀吉に求めた。かねて九州を征伐しようとしていた秀吉は、即座に快くこれを承諾して、宗麟を帰らせると共に、使いを薩摩にやって、義久に兵をやめるようにと言いました。

よしひさ しょうち しょめん だいち ほお ひでよし ほんこう けっしん しめ
しかし義久は承知しなかった。彼はその書面を大地に放って、秀吉に反抗する決心を示した。そしてますます兵を送って大友氏を攻めました。

きゅうしゅうせいばつ 九州征伐

ひでよし ゆる う う てんしょう ひでなが
そこで、秀吉は朝廷のお許しを受けて、島津氏を伐つことにした。天正15年2月、先づ弟秀長ら大阪から先発させて、自分は3月1日に京都を出発して九州に向った。その兵およそ200,000余、海陸から堂々と九州に渡ると、一方で秀長らを豊後から日向方面に向わせて、一方は自分が率いて、肥後方面か

ら薩摩に向った。 両方面とも連戦連勝、全く破竹の勢いでした。 5 月朔日には、秀吉は早くも薩摩の泰平寺（薩摩郡東水引村宮内）まで進み、秀長らの軍も将に鹿児島を衝こうとしていました。

今は島津義久も、如何ともすることが出来なかったので、ついに髪を剃って、名を龍伯と改め、5 月 8 日に自ら泰平寺に行って和を請うた。 秀吉はすぐにこれを快く許した。 家は龍伯の弟の島津義弘に継がせて、旧領の薩摩、大隈と日向の南部を与えてその領地としました。

おにむさし
鬼武蔵

この時、最後まで降参しなかった島津家の家来に、新納武蔵守忠元と言う者がいた。 鬼武蔵といわれるほどの勇士ですが、又、学問にも心を寄せて、殊に和歌の道にも通じていた。 薩摩のうちでも北の方の、肥後、日向、大隈の三国の境に近い伊佐郡の大城を守っていたが、義久が降参してから後も、忠元は降参しないで抵抗していた。 島津義久が堅くこれを制して降参させたので、ついに止むを得ず、髪を剃って名を拙斉と改めて、秀吉の陣所に来て降参したが、場合によっては秀吉を刺し殺すつもりで短刀を懐に忍ばせていました。

ところが、秀吉は鬼武蔵が来たと聞くと喜んで会って、主家のために最後まで戦った忠義を褒めて、褒美にと刀を与えた。 しかも、これを渡す時に、殺せるものなら殺してみよといわんばかりに、わざと自分分は鞘を持って、柄を拙斉に向けて出した、さすがの拙斉もこの度胸には全く驚いて、思わず、はつと平伏してその刀を頂いた。

そこで、秀吉は用意の酒を出させて拙斉に飲ませた。 それを飲むときに、拙斉の鬚髯が - 鐘馗（注：中国の魔よけの神）のようにむしゃむしゃと立派に生えていたので - 擦れ合って微かに音を出すと、その席にいた細川幽斎（藤孝）が、もとより文武両道の心得のある人だったので、ふとこれに興味をおぼえて、

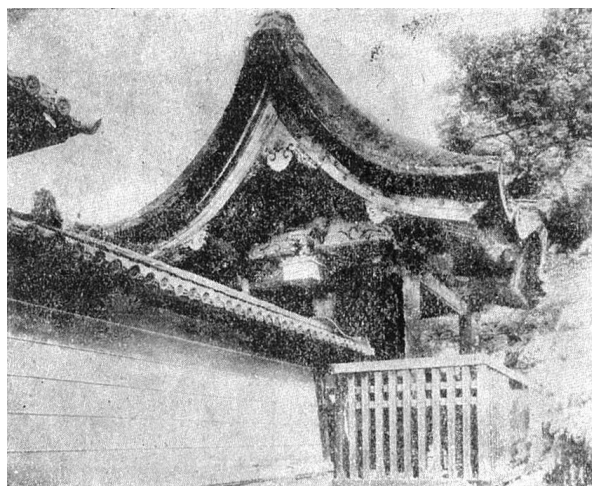
口のあたりに鈴虫ぞ啼く

と下の句を詠みかけた。 拙斉はぐっと大盃を飲みほすと、すぐに、

頬鬚をチンチロリンとひねりあげ

と聲高らかに上の句をつけて一種の狂歌にした。 いわゆる当意即妙の応酬で、秀吉を始め一座の者も皆興に入ったということです。

さて、秀吉は九州を平定すると、豊後の大友氏や肥前に龍造寺氏らに旧領をもとの通りに領させた外に、黒田孝高に豊前を、小早川隆景に筑前を、佐々成政に熊本城をとるように、それぞれの領地を定めておいて兵をかえした。 7 月 14 日に大阪に凱旋したが、この時、後陽成天皇は特に勅使を下して秀吉の遠征の労を慰められた。



京都 だい とく じ から もん
大徳寺の唐門



京都 にし ほん がん じ ひ うん かく
西本願寺の飛雲閣

おりから、京都に新築中でした聚楽第もすでに落成していたので、秀吉は9月13日にこれに移った。名に負う天下の秀吉が、金を惜しまずに造ったのですから、この邸宅の構えが非常に壮麗なものであったことは言うまでも無いでしょう。 — 今の紫野の大徳寺の唐門や西本願寺の飛雲閣はその遺物であると言われてい

じゅらくだい ぎょうこう
聚楽第の行幸

天正16年正月、秀吉は天皇に聚楽の第に行幸をお願いして、4月14日に臨幸を賜わった。この日、関白秀吉は、早朝に参内して天機を伺い奉り、左右大臣を始め、織田信雄、徳川家康、前田利家以下の文武の百官を率いて行幸のお供をしたが、行列は、御所から聚楽の第まで凡そ1,6 kmの間、先駆がすでに聚楽の第に着いているのに、最後の者はまだ御所のご門を出なかったというほどで、これが、6,000人の武士が警護している間を、粛々と進んで行くさまは、実に盛んで、美しく、まるで絵のようでした。

沿道には四方から士民が集まって拝観した。戦乱に戦乱がつづいて、一時は全く荒野同様になった都に、今またこの盛儀を見たのですから、彼等がどんなに喜んだかも想像されます。「今日、この泰平のさまを見ようとは思ひもかけなかった！」と、互いに手を取り合はんばかりにして、嬉し涙を流したということですが、思えば、第102代後花園天皇が永享9年に、4代将軍足利義満の室町の第へ行幸されて以後、ちょうど150年ほど絶えていた行幸をまた拝観したのですから、さもあるべき事です。

きんのう ちか
勤皇の誓い

やがて、天皇が聚楽第にお着きになると、着座の式があつて、饗宴が開かれ、天盃を秀吉に賜った。夜の管弦のお遊びには、天皇親らも箏をお弾じになった。翌15日に、秀吉は皇室の御料として新たに多額の金穀を年々献上すること、及び諸門跡、諸公家のために領地を寄進することを言上したが、更にまた、信雄、家康以下27人の大名に、「朝廷に対して永久に臣節を尽すこと、及び関白の命令には、いかなる事にも背かないこと」という誓いをさせた。



後陽成天皇の聚楽第行幸

もちろん、この誓いは、秀吉の朝廷に対する忠誠を表すためになされたものではありませんでしたが、一面でまた、彼の主人筋に当る織田秀信、同信雄も、及び、もと同列でした利家や対抗者であるべき家康らをも皆、この機会において、正式に自分の配下に属させたものでもありました。

3日目の16日には和歌の御会があった。「寄松祝」という題で、君臣ともに祝賀の心を詠んだ。

わきてけふ待つかひあれや松が枝の 世々の契りをかけて見せつつ

という御製に対して、秀吉は身にあまる面目を施しながら、

万世の君がみゆきになれなれん みどり木高き軒のたま松

と御返歌申し上げた。

4日目の17日は、舞楽を天覧され、5日目の18日に還幸を仰せ出された。御行列は行幸の時と同じでしたが、ただ前駆の前に、長櫃30枝、唐櫃20荷が多くなっていた。秀吉が心を籠めた献上品を納めたものでした。

秀吉は御所までお供をして、行幸の御礼を申し上げて、

行幸なほ思いし事のあまりあれば かへるさ惜しき雲の上人

という和歌を奉った。天皇は非常に満足におぼしめして、

あかざりし心をとむるやどりゆえ なおかへるさの惜しまるかな

という返歌を賜った、君臣の親しい情味が誠に溢れるばかりです。

聚楽第の行幸は、実に久しぶりに見る昇平の日をあらわしたものでした。秀吉はこれによって基礎を堅くして、ますます威を諸将の間に示したが、朝廷もまた、これより室町時代の御衰えを回復した。天下の秀吉が行幸を仰ぎ奉って臣下の礼をつくしたことは、久しく大義を忘れていた者共に、皇室の尊厳を悟らせるに大いに与って力があつたのです。

小田原征伐

こうして世はますます泰平に向っていましたが、まだ関東及び奥羽のほうには、割拠している群雄も少なくなかった。分けても小田原の北條氏は、早雲以来の武力を擁して、独り傲然と関東に威を張っていた。

天正16年の5月、即ち聚楽の第に行幸を仰いだ後、間もなく、秀吉は使いを小田原に送って、北條氏直に上京を促した。ところが、氏直は、もともと秀吉に従う気などは無かったので、これに応じなかった。しかし、秀吉は、その後もしばしばこれを諭して見た。氏直は頑としていつもこれをしりぞけた。天正17年10月、ついに秀吉は朝廷に奏して、北條征伐のお許しを受けた。そしてその12月に、諸将に出陣の用意を命じた。

天正18年3月朔日、秀吉は自ら170,000の兵を率いて京都を出発した。19日に駿府—今の静岡—に着き、その翌日、すでに先発していた家康が、沼津の北方の長窪の陣から引き返して来たのと会って、ここで軍儀を凝らして後、共に進んで、28日に長窪に行つて諸軍を配置させた。すなわち織田信雄は福島正則、細川忠興らと共に伊豆の菰山城に向かい、秀吉の甥の秀次は、堀尾吉晴、山内一豊らと共に箱根の山中城を囲み、家康の軍は足柄方面から小田原に向かうことにした。

各軍共に29日から攻撃を開始したが、箱根、足柄方面の諸城は、忽ちこれを陥れることが出来たので、この方面に向つた諸軍は、早くも4月3日には進んで小田原城を囲んだ。

秀吉はその9日に、本陣を小田原の西南に当る石垣山に定めて、城を眼下に見下ろすようにした。

又、このころ、越後のほうから進んで来ていた上杉景勝、前田利家らは、既に上野から武蔵に進んで、しきりに諸城を攻め降していたし、長曾我部元親らの率いた水軍もまた無事に小田原に着いて、すでに上陸していた。

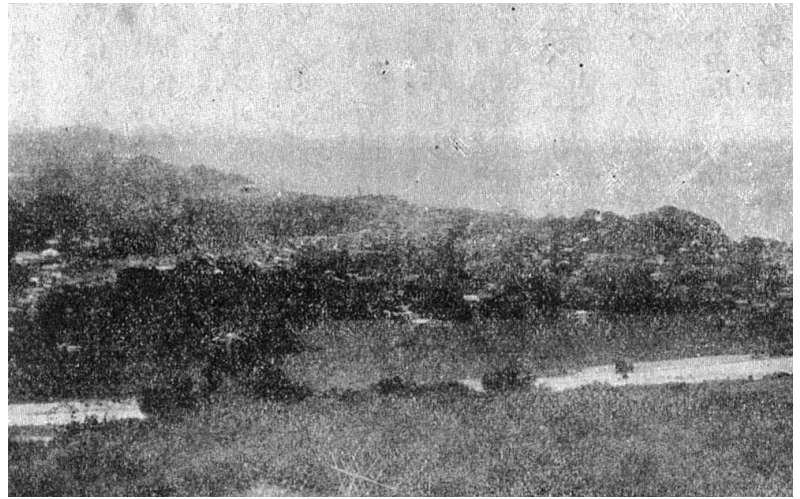
斯うして攻撃軍の勢いがますます盛んになるばかりなのに引きかえて、小田原城は今は全く孤立した。けれども、城は要害であつたし、将士は勇武でした。北條氏直らは父祖伝来の兵法を守つて、ちつと動かずに静まり返っていた。

第21話 豊臣秀吉の国内統一

ちょうい けい 長圀の計

しかし一方、^{ひでよし}秀吉もまた、^{ようい}城は容易に
^お落ちまいと^{はじ}初めから^{おも}思っていたので、
^{ゆうぜん}悠然と^{ちょうい}長圀の^{さく}策を^{こう}講じていた。

彼は^む向かい^{じろ}城を^{いしがきやま}石垣山に^{つく}造って、全
^{かんたく}軍を^{りょうしょく}監督しながら、^つ城中の^糧食の^つ尽き
るのを^ま待つことにした。^{よう}用の^無い^諸陣が
^{たいくつ}退屈を^{しの}凌ぐためには、^{いろいろ}色々の^{ゆうぎ}遊戯を^{させ}させ
たり、^{ちや}茶の^ゆ湯や^{しゅえん}酒宴などを^{もよお}さえ^催催
した。^{じしん}秀吉自身^{ちやしつ}お茶室を^た建てたりなども
しました。



いしがきやま こせんじょう み おだはら
石垣山の古戦場から見た小田原

この時、^{いがい}小田原城^{てき}以外の^{にらやまじょう}敵の^お城では、^{じょうしゅう}ただ1つの^{ちゅうけんび}蕪山城が^お落ちずにいた。その^お城^将は^{ちゅうけんび}智勇兼備の
^{ほうじょうちのり}北條氏規^{ようがいけんご}でしたし、^{ひでよし}城は^し要害^せ堅固^おでもあるので、^{ひでよし}秀吉は^しこれも^せ強いて^お攻め^お落とそうとは^せせず、^おただ^お小田原
城との^{れんらく}連絡を^{たも}保たせないように^{てはい}とだけ^{てはい}手配していた。

だ て まさむね 伊達正宗

こうして^{ゆうゆう}悠々と^{おおう}日を送っていると、^{ちほう}奥羽地方の^{ごうぞく}豪族は、^{ひでよし}秀吉の
^{いふう}威風を^{のぞ}望んで^{あらそ}争って^き来て^{ぶか}部下に^{ぞく}属した。^{ゆうめい}有名な^{だて}伊達^{まさむね}正宗が^{くだ}降って
来たのもこの時の事です。^{ころ}彼は^{あいづ}その頃、^{あいづわかまつ}会津（今の会津若松市）の
^{くろかわじょう}黒川城に^{とうねんと}いたが、^{わかもの}当年^か取って^か24才の^か若者で、^か且つ^き聞こえた^{ごうゆう}剛勇で
も^{ばあい}あったので、^{ひでよし}場合によっては^つ秀吉を^{ころ}突き^{たんと}殺すつもりで、^{ふどころ}短刀を^{ふどころ}懐
にして、^{ひでよし}石垣山の^{ひでよし}秀吉の^{ひでよし}前に^{ひでよし}出た。

^{ひでよし}秀吉は^{しょうぎ}床机に^{こし}腰を^{ほそ}かけて、^{つえ}細い^も杖を^{はる}持っていたが、^{はな}遥かに^{はな}離れ
^{へいふく}て^{まさむね}平伏する^{まさむね}正宗を^{ちか}見ると、「^よおお、^{えんりよ}よく^{えんりよ}来た、^{えんりよ}近く^{えんりよ}寄れ、^{えんりよ}遠慮するに
は^{およ}及ばない」と^い打ち^うとけて^{こえ}声を^{まさむね}かけて、^{まさむね}正宗が^{まさむね}ずっと^{まさむね}近く^{まさむね}に来て^{まさむね}かし
こ^{つえ}まると、^{くび}その^{かる}杖で^う彼の^{はや}首を^き軽く^き打ちながら、「^き早く^き来て^きよかった、
^{あぶ}さもないと、^{あぶ}これが^{あぶ}危な^{あぶ}かったよ」と、^{こどもあつか}まるで^{こどもあつか}子供^{こどもあつか}扱い^{こどもあつか}にしたので、^{まさむね}正宗は^{まさむね}すっかり^{どぎも}度肝^ぬを^ぬ抜かれて、^{こころ}心^{こころ}か
ら^{おそ}恐れ^{おそ}入ったと^{つた}伝えられています。

又、この時、^{いくさもよう}天下の大軍の^い軍^い模様を見せて^いやると、^{がけぎわ}崖際、^{ひとつ}一^つ突き^{ころ}突けば^お転げ^お落ち^おそうな^{きけん}危険な^{きけん}ところ
に^{さき}先に^た立って、^{へいき}平気で^{ありさま}小田原^{ありさま}攻めの^{ありさま}有様を^{せつめい}正宗に^{せつめい}説明して^{せつめい}聞かせたので、^{まさむね}伊達正宗は^{まさむね}はいよいよ^{まさむね}その^{まさむね}度^{まさむね}胸^{まさむね}に^{まさむね}恐
れ^い入って^い帰国^いしたと^い伝えられています。

さて、^{ろうじょう}小田原城の^{ろうじょう}籠城も、^{しだい}100日^{くる}近くになると、^{しだい}次第に^{くる}苦しく^{くる}なって^{くる}来ました。それに、^{ほういぐん}包圍軍に^{ない}内
^{おう}応する^{もの}者なども^{おう}出て^{おう}来たので、^{うちなお}ついに^{うちなお}北條氏^{うちなお}直には^{うちなお}支え^{うちなお}きれなくなり、^{こうさん}降参^{こうさん}しました。^{ひでよし}秀吉は^{ひでよし}これを^{ゆる}許し



だ て まさむね
伊達正宗

第21話 豊臣秀吉の国内統一

て、^{うちなお}氏直の父の^{うぢまさ}氏政に切腹を命じて、^{せつぷく}氏直の死はこれを許して^{めい}小田原城の^{うちなお}囲みを解いた。^し7月5日の事^{ゆる}です。^{かこ}

^{にらやまじょう}蕨山城はこの時までなお持ちこたえていたが、すでに^{こうふく}小田原城が降伏した以上は、^{いじょう}籠城するにも及ぶ^{ろうじょう}まいと、これもまた出でて降った。^{およ}

^{ひでよし}秀吉は北條氏の^{りょうち}領地はことごとくこれを没収して、それに上総、^{ぼっしゅう}下総を加えて家康に与え、^{かづさ}家康の旧^{しもふさ}領地は返させて、他の諸将に^{いえず}分与した。^{あた}^{いえず}^{きゅう}

奥羽平定

そして7月13日に奥羽地方^{むか}に向ったが、そこには、もはや彼に反抗する者は1人もいなかった^{はんこう}ので、^{しもつけ}下野の^{なすの}那須野に出迎えた^{でむか}伊達正宗^{だてまさむね}を先駆として^{せんく}会津の彼の^{あいづ}居城に至ると、ここで奥羽地方の^{きょじょう}処分を定めた。^{いた}^{しょぶん}^{さだ}^{まさむね}先づ正宗を会津から^{あいづ}米沢に移して、^{よねざわ}会津には^{うつ}蒲生氏郷^{がもうぢさと}を置いて、今の^お岩代、^{いわしろ}磐城を^{いわき}領させる事にした他に、^{りょう}これまでこの地方に^{ほか}割拠していた^{ちほう}諸氏の^{かつきよ}領地をもそれぞれ定めてから、^{しよし}凱旋の途に就いた。^{りょうち}^{さだ}^{がいせん}^と^つ

京都に^{きちやく}帰着したのは天正18年(西暦1590年)の9月1日でした。^{おうにん}応仁の乱後100余年の間、^{らん}乱れに^{みだれ}みだれた日本国中も、ここに始めて^{はじ}全く^{まった}平定したのです。^{へいてい}実に^{のぶなが}信長の^{いぎょう}遺業を継いでから^つ僅かに^{わづか}8年余で、^{ひでよし}秀吉は全国を統一したのです。^{ぜんこく}^{とういつ}

北條氏の末路

なお、^{ついで}序でに述べておきたいのは、^の北條氏の^{あとしまつ}後始末です。^{うちなお}氏直が余りにも^{あま}頑なに^{かたくな}抵抗したので、^{ていこう}秀吉も一旦はその^{いったん}領地をことごとく^{りょうち}没収したが、^{ぼっしゅう}といて、北條氏を滅ぼしてしまうつもりではなかった^{ほろ}ので、^{うちなお}一時、氏直を氏規と共に^{うじのり}紀伊の^{きい}高野山に登らせたりして、^{こうやさん}謹慎させておいた。^{のぼ}そして天正20年になると、^{きんしん}伯耆の^{うちなお}領主にしようという^{ほうき}約束までしたのですが、不幸にも、氏直はその前年の19年11月に、^{りょうしゅ}病のため^{やくそく}に30才で没した。^{ふこう}氏直には子が無かったので、^{うちなお}秀吉は北條氏規に後を継がせて、^{ひでよし}河内の^{うじのり}狭山の^{あと}領主にした。^つ戦前の^{かわち}北條子爵家は^{さやま}即ちその^{りょうしゅ}子孫です。^{ししゃくけ}^{すなわ}^{しそん}

(第21話 豊臣秀吉の国内統一 終わり。 次は前頁に戻り、 第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐 へ)